

令和2年度 MieMu の活動と運営の外部評価結果（概要）

外部評価は、以下に示す基本的な考え方に沿って実施した。

- ・ 内部評価では、各種の活動（事業）においてコロナ禍の影響が大きかったものの、「中期計画の目標値を維持し」、「当初定めた指標と目標に基づき、客観的評価を行った」とした。しかし、当部会では、取り巻く環境の大きな変化があったにもかかわらず当初目標で評定することは、事業の「適正（妥当）な評価」を損ねる恐れがあると考え、当初目標には拘泥せず、置かれた状況を勘案し、過去の同種事業の実績も参考に評定を行った。
- ・ 館の責に帰することができない事業の中止や、判断材料を欠く場合には、「1. 達成できていない」ではなく、あえて基準には無い「評価不能」とした。
- ・ 評価指標に定める目標値や考慮すべき過去の実績を基に評定したが、特段の考慮すべき事情がある場合には、その理由を付して、基準とは異なる評定を行った。

【評価結果】

- ・ 学芸員の調査研究活動の結果（成果）について、年間の研究成果公表数は目標（13回）を大きく上回る24回に達し、評価できる。その内訳を見れば、一人で6件を数える者がいる一方で、0件の者がかなりいて個人差が大きいことは、単年度の結果であることを考慮しても、今後の改善が望まれる。
- ・ 成果の公表について、資料データベースの閲覧件数（6,459回）は、コロナ禍の「巣ごもり」事情も想定されるが、目標（5,000回）を上回った。また、新規データの登録（304件）も着実に進んでおり、引き続き公開情報の充実に努められたい。
- ・ 資料の保全・継承については、目標とした定期点検や清掃は実施できたが、残念ながら虫害が発生して、一部の資料が毀損したため、評価は「2」とした。広汎な分野のさまざまな形状・性質の資料を、一施設内ですべて安全に保管することは容易でないが、今回の経験を糧に、再発防止に努められたい。

以上の3戦術から成る戦略1の達成状況について、第三者による評価では、研究成果の発表者の偏りや虫害の発生から「2」との評価であった。改めて当部会で検討した結果、研究成果の公表や資料整理が進んでいることから、「3」と判断した。ただし、虫害に関しては定期的な点検・清掃は行っていたものの、結果

として発生したことは、戦略の判断基準である「アウトカム＝成果」の視点からは「達成」とは言い難く、改めて再発防止を求めたい。

- ・ 基本展示では、開館日や入場者数の制約を受ける中で、コロナ禍が沈静化した夏以降、例年は観覧者数が少ない10月に年間最多の観覧者（4,899名）を記録するなど、悪条件の中でも、一定の観覧者（26,923人）を確保できたことは評価できる。
- ・ 企画展は、早い段階で開催予定の3本がすべて中止を余儀なくされる中で、代替のトピック展2本を開催できた。特に「クジラ」展では、総合博物館としての特徴や三重大学との連携効果を活かし、直近の自然科学系の企画展を上回る観覧者（17,209人）を獲得できたことは大いに評価できる。

以上の展示に関する戦略の実績（基本展示74%、トピック展平均71%）は、目標値（75%）に達していない。しかし、過去において目標値は、基本展示では60%代前半で推移し、最高だった昨年度でさえ67.7%、企画展示でも、過去6年間（平均68.1%）で75%を上回った例は、昨年度の「近藤喜文」（85.8%）と「三重の仏像」（78.8%）のみである。代替開催で準備期間が十分確保できない中で、過去の実績を上回る満足度を獲得できたことから、「3」と評価した。

- ・ 地域への理解を深めてもらうことを目的にした学校対象の参加型調査については、計画した時期と学校の休校措置が重なったことや、時期を変更しての実施が不可能であったため、「評価不能」とした。
- ・ 地域の魅力を伝えることを目的とした学芸員による出張講座は、11月にHP上で講座の内容・方法など詳細情報を掲出したところ、目標（1,040人）を大きく上回る36団体（1,568人）の利用を得たことは評価できる。対面事業が困難な中、引き続き利用者の安全確保に留意しての活動を期待したい。

以上の地域への愛着を育むための戦略については、事業における利用者の満足度を指標に評定することになっていたが、戦術6は事業中止、戦術7はデータ取得のためのアンケートが実施できておらず、「評価不能」と判断せざるを得なかった。事業中止は致し方ないにしても、アンケート結果による評価ができなかったことに対しては、再発防止と次年度以降の確実な実施を求めたい。

- ・ 利用者の参画や交流を目的とした事業のうち、ミュージアムパートナーについては、コロナ禍の影響で上半期の活動を休止せざるを得なかった。活動期間が例年の半分に制限されたことや、多くの参加者が見込める「フェスタ」行事が中止になったことを考慮すれば、十分な活動と成果（利用者496人）

を挙げたと判断できる。こうした悪条件の中で、引続き多くの会員が活動を継続するとのことであり、来年度以降も会員の期待に応える事業展開が望まれる。

- ・ 多様な主体との連携として、開館以来、急成長を遂げてきたコーポレーション・デーもコロナ禍の影響を受け、予定していた6団体の内、1団体しか実施できなかった。積極的な集客行為が困難な中で、当日の入館者が368名（年間平均284人）であったことは、一定の評価ができる。再び、昨年度以前の活況が戻ることを期待したい。
- ・ 研究機関等との連携については、「クジラ」展での三重大学との積極的連携や、岐阜県博物館との交流などを通じて、目標（700人）を大幅に上回る利用者（28,353人）を得たことは大いに評価できる。今後は、今年度予定しながら中止を余儀なくされた県立の他施設や他大学等との積極的連携による相乗効果の創出を期待する。

以上の3戦術から成る戦略4の達成状況について、内部評価にも「アンケート調査をほとんど実施していない」とある通り、先の戦略3と同様に評価の前提となるデータが無いため、評価不能と判断した。戦術10の評定が「4」であることから、事業を実施しながら評価不能に終わったことが惜しまれる。

- ・ 学芸員による博物館の資源やその活用方法を利用者へ伝える事業については、コロナ禍の下で、「MieMu@ほーむ」（12,533アクセス）やフォーラムのライブ配信を通じて、効果的に発信できたと判断できる。
- ・ 学芸員との対面事業を中心に、「調べ方」を学ぶ事業については、5事業6回の内、2事業2回が中止を余儀なくされる中でもできうる事業を実施し、予定数には満たないものの、一定の参加者を得たことは評価できる。ワイヤレスイヤホンの導入にとどまらず、リモート事業の可能性も含め、安全を確保しつつ学べる機会の創出を期待したい。

学芸員が知的資源やその活用方法を伝える戦略5では、「県政eモニター」へのアンケート結果（922名）で目標（「目的の情報が得られた：75%」）にわずかながら達しなかったことから、「2」と評定した。インターネットを中心にさまざまな情報が飛び交う昨今、目的の情報がより見つけやすい、早く到達できるための工夫が求められる。

- ・ 子どもたちの学習機会の充実に関して、コロナ禍の影響で、核となる「こども体験展示室」が年間わずか2日しか開室できなかったため、「評価不能」と

した。こうした中、臨時交付金を得て、抗ウイルス・抗菌加工、床面の貼り替え等の実施など、再開に向けての努力は評価したい。

- ・ 子どもたちに学習の楽しさを伝える事業については、他の事業と同様にコロナ禍の下、実施や参加人数が限られる中で、安全対策を十分施しながらの実施となり、中止を差し引いた目標人数（758人）には届かなかったが、395人の参加者を得たため、一定の評価はできると判断した。「調べ方」を学ぶ事業と同様に、今後、さらなる開催（実施）方法の工夫を重ね、事業を継続して欲しい。
- ・ 学校と連携した課題探究型学習の支援については、5月末までの県内高校の休校にもかかわらず、再開後は9校を対象に33回に亘って実施し、2,077人（目標1,500人）の支援ができたことは、大いに評価できる。

次世代育成を目標とした子どもたちの学習機会の充実（戦略6）については、参加者数を指標とする戦術13や14の結果が「評価不能」や「2」であったが、戦略（アウトカム）指標であるワークショップ等での19歳以下の満足度が目標（75%）を超える77%に達したことから「3」と評定した。戦術13や14が人気の事業であることから、目標とした開館日数や実施回数を確保できる日が戻ることが待たれる。

- ・ 業務の改善に向けた定期的な進捗管理については、一定数（7件）の課題を明らかにしたことは評価できる。

戦略について内部評価結果では、「できることは極力行う」とともに「創意工夫して県民のみなさまに楽しんでいただいた」ことから、「3」とした。しかし、本戦略の目的が「評価制度の活用」であり、評価指標が「各事業のコストパフォーマンスの改善」であるにも拘らず、戦略3及び4において、評価の基礎・前提であるアンケートを通じたデータ取得を怠ったことは看過できないと判断し、「2」とした。来年度以降、こうした事態が起こらないよう、再発防止策の策定とその確実な実施を求めたい。

【提言】

今年度の評価を実施する中で、本評価制度における以下の課題が見つかった。

一つは、先にも指摘したとおり、戦略2の評価指標とした展示観覧者の満足度について、目標値である「4とした回答が75%」が、過去の実績に照らして高すぎるのではないかという点である。仮にそうであるなら、当初から達成不可能

な目標ということになり、評価制度が機能しなくなる。改めて部会当日に配布された過去の実績を確認の上、目標値の再考を求めたい。

2つ目は、戦術11の評価指標である。戦術は「学芸員がHPや館の情報誌での情報提供を充実します」で、その評価指標は「博物館職員のWebページアクセス数」となっている。当該ページは「学芸員の紹介」(※)であり、掲載情報は、個々の学芸員の「専門分野、研究活動(著作等のリスト)、担当している仕事、過去に担当した主な展覧会、MieMuのここがおすすめ!」である。「県民が広汎かつ手軽に」得たい情報に、学芸員個々の情報も含まれるかも知れないが、それよりも内部評価でも紹介している、例えば「MieMu@ほーむ」や、同ページ内にあるスタッフによる基本展示室紹介「へーそうなんや!三重」(基本展示紹介動画)へのアクセス数が、より戦術目的に合致した指標と考える。

以上の再考や変更は、評価期間中の指標や目標値の変更であるため、経年の比較ができなくなる、あるいは「結果を見た後の目標の引下げ」とのそしりを受けかねないため、躊躇される。しかし、根拠が正当であり、評価の目的がモチベーションの維持・向上、更には「改善」や「説明責任を果たす」ことであるなら、躊躇よりも英断が求められるのではないか。当部会として、館内での再考を提言する。

※ <https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/MieMu/000237360.htm>

【まとめ】

当館の評価は、第1期(2014~2016年度)及び第2期(2017~2019年度)を経て、第3期(2020~2023年度までの4カ年)に入った。

その初年度の結果を見ると、戦術については、「4」が6項目、「3」が4項目を占め、達成度に難がある「2」は4項目である。また、評定が「2」となった戦術は、戦術3を除いて、何れもコロナ禍で予定した事業の実施やその回数が確保できない中で、評価指標が「参加人数」であり、やむを得ない結果と考える。こうしたことから、初年度である2020年度については、コロナ禍にもかかわらず、博物館活動(事業)は相応の結果を残せたと判断できる。

これに対して、戦略の結果は、「4」は無く、「3」が3項目、「2」が2項目、「(評価不能)」が2項目であり、戦術と比べて相対的に低い。これは「成果=(アウトカム、事態の変化)」がやや低調であることを意味するが、成果は必ずしも一朝一夕に現れるものではなく、今期(4年)を通じての変化を見守る必要がある。

これとは別に、戦略の評価結果には、今後の改善にとって不可欠な要素が含まれる。その一つは、「-」（＝評価不能）項目が2つ生じたことである。評価結果でも言及したとおり、原因は指標である満足度を測定するためのアンケートの実施を怠ったことにある。これは、本評価制度の根幹を揺るがすこととなりかねず、反省を求めたい。

また、こうした事態を未然に防げなかったことは、戦略7に掲げる、進捗管理を通じて「コストパフォーマンスの改善」や「経営資源の効果的配分」といった「評価制度の活用」を阻害することにもなるため、改めて再発防止と改善を求めたい。

以上、2020年度事業の評価とそれに基づく提言とする。繰り返しになるが、評価が事実の特定にとどまらず、その価値判断が行われ、結果が業務の改善と説明責任を果たすことに結びつき、県民をはじめとする利用者に対するサービスと、職員のモチベーション向上につながることを期待する。

別表 評定点の推移 (2020～2023 年度)

戦略	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	戦術	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
戦略 1 (01)(A)	3				戦術 1	4			
					戦術 2	4			
					戦術 3	2			
戦略 2 (01)(02)(03) (A)	3				戦術 4	3			
					戦術 5	3			
戦略 3 (03)(A)	-				戦術 6	-			
					戦術 7	4			
戦略 4 (02)(B)	-				戦術 8	3			
					戦術 9	2			
					戦術 10	4			
戦略 5 (02)(B)	2				戦術 11	4			
					戦術 12	2			
戦略 6 (02)(B)	3				戦術 13	-			
					戦術 14	2			
					戦術 15	4			
戦略 7 (業務改善)	2				戦術 16	3			
合計	13					44			
百分比(※)	65%					79%			
「4」の個数	0					6			
「3」の個数	3					4			
「2」の個数	2					4			
「1」の個数	0					0			
「-」の個数	2					2			

「-」は評価不能。

※は、評価不能を除く全項目の評定が「4」であった場合を100%とした際の達成割合